

平成二十一年十月一日発行（毎月1回1日発行）通巻八三七号
昭和二十五年四月三日第三種郵便物認可

火星

平成二十一年十月号



七曜抄 (六)

山尾玉藻

片むすびの十六甞豆呉れにけり

赤とんぼ頭大きな子が好きで

高下駄が地藏会差配しに来たり

桐一葉落ちたる音の山磧

赤ん坊の両手つきたる月の卓
容よき山の裾なる芋嵐
蓑虫の蓑鳴神の滝じめり
駅に来て本気で払ふ草虱
どうしても水へ傾く括り萩
カナリアに台風逸れてゆきにけり

太白星

柳生千枝子

音もなく咲き重なりぬ遠花火
夏風邪や日記数日空白に
冷奴ひとり夕餉すぐ終る
天道虫小さな髭をつけてゐし
八月の木々をゆらせて風走る
盆の月住所わづかな住所録
亡き人をまた思ひをり星月夜

杉浦典子

蟬の穴子に庇はれてゐるやうな
月涼し魚拓の口のとんがれる

水中花の向う帆船通りけり
雲の峰夫が応への片手上ぐ
ひるがほや砲台に火と風の跡
ももいろの守宮の腹のつめたかり
藍染の甚平の紐徒結び

浜口高子

箒木の根もとに日暮れきてゐたり
頼朝の海に育ちつ雲の峰
天牛鳴く踏まれどほしの餓鬼の貌
登り窯のほむらを離れ夜の秋
碁会所の継ぎの当てある簞
研ぎ屋ぬし跡濡れてゐる夏祭
夕立あと単線電車の火花かな

火星作品

山尾玉藻選

船鉾のまづは舳の組まれけり
鉾立や塵掃くことのうるはしく
祇園会や屏風に銀の草そよぎ
水中花極道されの色なりし
百歳の母の素足を拝しけり
すこし濡れ一氣に濡るる水遊び
梅筵星の暗さに匂ひけり
さるをがせ溪川の音乱れなき
みづうみのはがね色なる土用かな
日盛の棚田に落つる水の音
蟬の木の下にも書く男かな
屏風絵の位置の定まる簞
熱帯夜光る港の石畳
神戸深澤鱻
八幡大山文子
明石戸栗末廣

躑の磧をあるく大暑かな
日焼子の手足にひかる砂の金
独り子にひとり子のあり日焼せる
子の舌の蜥蜴めきをりかき氷
雨の香の子を抱きとむる螢の夜
暑き夜の船へ車のすべり入る
祭馬踏みたる地や水にぢみ
川風の袂にあふれ祭果つ
くれがての金魚よこ顔ばかりなり
祭笛頂は灯の寄り合うて
手拭は鉾名入りなり缶ビール
鉾立や枕当てある心柱
蓼の葉を涼しく播つて呉れにけり
宵花火白衣の首の聴診器
蓮池の暗き水面に鷺の嘴
斜に見る太陽の塔草いきれ
嘴に捕はれし蟬鳴きにけり

宝塚山本耀子

大和郡山城 孝子

八幡丸山照子

選のあとに

山尾 玉藻

まびすしく蟬が鳴く風景は暑苦しいものだが、たった一人の男性の介入で涼感漂う一句となつてゐる。

鉦立や塵掃くことのうるはしく

深澤 鱧

鉦立や 枕当てある心柱

山本 耀子

祇園祭の「鉦立」は全て男性の手で成され、太縄のみで組み上げられる。縄の巻き目や結び目は際だつて緻密で、芸術的である。感嘆の眼差しで鉦立の様子を眺めていた作者は、縄屑を掃き寄せる男の仕草にさえ特別の感慨を抱いたのである。「鉦立」は男性にとつて悠久のロマンなのかも知れず、「うるはしく」は自ずと授かつた実感なのだろう。

すこし濡れ一氣に濡るる水遊び

戸栗 末廣

祭笛頂は灯の寄り合うて

城 孝子

「水遊び」をする子供は、初めは水の冷たさにちよつとたじろぎ、その内急に大胆に水と戯れるようになる。「すこし濡れ一氣に濡るる」とは、そんな有り様をリアリティーに且つ的確に述べた表現であり、そこには「水遊び」の楽しさ、嬉しさの普遍がある。

蟬の木の下のもの書く男かな

大山 文子

独り子にひとり子のあり日焼せる

丸山 照子

蟬が盛んに鳴く木陰に座り込み、手帳でも広げて何やら一心に書き込んでいるこの男性、もしや俳人ではなからうか。書くことに夢中でその耳に蟬声は届いていないのだろう。か

作者の独り息子さんにも一粒種のお嬢ちゃんがおられる。「日焼せる」は、健康的で幸福そうな父娘像を印象付け、同時にそれを眺める作者自身の満足感をも充分に伝えている。世に言う吾子俳句、孫俳句の弊害を微塵も感じさせないところに好感を覚える。(以下略) 下略)

恒星圈

丸山照子

赤松を上げし山鉾雲払ふ
鉾立ちし夕べ酢の香のただよへり
比叡より朝日さしくる鉾祭
下駄はけば足裏よろこぶ祭かな
鉾辻の三方の山けぶりをり

廣畑忠明

山田美恵子

祇園会に子ら来ると言ふ口囃子
鶏鉾に豆腐屋の婆も出て
提灯の揺れるばかりの朝の鉾
教はりて鮎の骨抜く貴船茶屋
今組みし櫓につまむ鯖の鮓

男等に真木涼しく上がりけり
櫓搔いて岸へ押しやる蛇の衣
白玉のをどり浮びし宵祭
滝殿や皿もお椀も紅づくし
海の日の海色映ゆる観覧車

堀志皋

山本耀子

誘はれて来てをり茅の輪くぐりけり
とうすみを捕食してをる蜻蛉かな
かはいいと怖いと言ひし青蜥蜴
外海の流れの速し烏賊釣火
口伝へに広まり月下美人かな

とんぼの羽残し子燕発ちにけり
蓮の葉のうごく影ある白障子
まはし飲む焼き締め徳利祭酒
向日葵の迷路や夫はまよはずに
ありがたく受く鉾粽軽ろきかな

獅子座

山尾玉藻推薦

根本ひろ子

陵の水嵩増せり雲の峰
祇園会のキャンパスに松にほひけり
青柿の集落にある櫓かな
廻廊にバケツころがる日雷

渡辺数子

祭宿家紋の幕をめぐらせて
上布着て月鉾立を指図せり
ひと言を告げて去にけりさなぶり会
橘の実を吸うてみる大暑かな

涼野海音

袖口の吹かれてゐたり花菖蒲
残りをり葉の破れたる柏餅
かうもりの口が笑つたかもしれぬ
油虫打ちたる音の残りけり

笠置早苗

転がりて蟬のひと声掃かれけり
棚の上の布袋が西日呼びゐたり
峰雲の遠くにあるはせつなかり
いま吾が寝言なりしか明け易し

天谷翔子

奥に碁を打てる気配の宵飾り
月鉾に女立たせて画架立てて
夏星の見えぬところは海であり
止り木を水着の濡らすサンセットバー

高橋芳子

磨崖仏在す一村栗の花
風灼けてレースカーテン膨らます
生身魂返信メール早かりし
かき氷このごろ夫の兄のやう

垣岡暎子

大山の巖へ崩れし雲の峰
連れ添うてゆくほかになし水中花
凌霄花一行で足る家族欄
夏草や完走自転車倒れ込む